

日本における薄鋼板薪ストーブの普及と衰退

竹本太郎 (東大院農)

要旨: エコブームや田舎暮らしを背景にして, 欧米から輸入される高級鋳物薪ストーブの需要が高まっている。一方, 板金屋や金属加工工場で製作される薄鋼板薪ストーブは, かつて北海道や東北をはじめとする寒冷地方の多くの家庭で利用され, 現在も一定数が利用され続けている。しかし, 薄鋼板薪ストーブがいつ頃から製作され, どのようにして普及し, いつ頃まで利用されていたのか, その実態は詳らかでない。本報告では, 1) 明治後期~大正期の北海道における「第一次薪ストーブブーム」, 2) それが石炭ストーブへ取って代わられる経緯, 3) 昭和30年代後半~40年頃の山村地域におけるプロパンガスの導入に伴う全国的な「第二次薪ストーブブーム」, 4) 灯油ストーブの登場による衰退, について文献および聞き取り調査から明らかにする。

キーワード: 薄鋼板薪ストーブ, 薪炭材, エネルギー転換

Abstract: Now in Japan, number of the high-grade casting firewood stove user is increasing whereas the steel-sheet firewood stove, manufactured by sheet metal workers or metalworking factories once widely used in cold district such as Hokkaido and Tohoku region, is hardly found in our daily life. However, a certain number of the steel-sheet firewood stove is still used in Japan. It is not clarified in detail when the steel-sheet firewood stoves were first manufactured, how they became popular, and until when they were used in our livelihood. From the research of references and interviews mainly to the stove makers this report shows 1) the first boom of steel-sheet firewood stove in Hokkaido from late Meiji to early Taisho era, 2) reason why the steel-sheet firewood stove was turned over by the coal stove, 3) the second boom of the steel-sheet firewood stove caused by appearance of the propane gas from Showa 30s to 40s in mountain villages all over the country and 4) the decline of the steel-sheet firewood stove caused by appearance of the kerosene stove.

Keywords: firewood, stove, propane gas, energy transformation, mountain villages

I はじめに

エコブームや田舎暮らしのみならず, 森林バイオマスエネルギーへの期待もあって, 最近, 多くの分野から薪ストーブに注目が集まっている。しかし, かつて北海道や東北をはじめとする寒冷地方の多くの家庭で薪ストーブは利用され, 細々とはいえ現在も一定数が利用され続けていることは余り知られていない。これは欧米から輸入される高級鋳物ストーブとはまったく異なるもので, 板金屋や金属加工工場で製作された薄鋼板薪ストーブ(以下, 薪ストーブ)である。ブリキは錫メッキ加工した薄鋼板, トタンは亜鉛メッキ加工した薄鋼板で, 板金工はトタン屋根の工事, ブリキストーブの製作など薄鋼板をハサミで加工する技術を持つ。ここではその薪ストーブがいつ頃から製作され, どのようにして普及し, いつ頃まで利用されていたのかを, 先行研究および2010(平成22)年3~4月に実施した薪ストーブメーカーへの調査の結果から考察し, 今後の調査・研究の課題を提示することを目的とする。

II 薪ストーブの誕生

氏家(9)によれば薪ストーブに関する国内最初の記録は1878(明治11)年の『各支庁, 各分署, 文移録』(北海道立文書館所蔵)に記載されている, 鉄板製の楕円形で正面に焚口がある薪ストーブの図(図-1)である。図の説明として「厚ブリキ, カーヘル五箇, 寸法は本庁局課ニ於テ使用に全シ」とあり, 北海道庁やその支庁でこのような薪ストーブが用いられていたことがわかる。

III 北海道における薪ストーブの普及(第一次薪ストーブブーム)

矢島(11), 氏家(9)の文献調査から, 明治後期から大正期にかけて薪ストーブが都市部から農村部へと普及していったことが想像される。1922(大正11)年北海道庁編の『札幌郡白石村ニ於ケル保健衛生調査』には「本村ニ於テ冬期防寒用トシテ用フルストーヴハ家庭用トシテハ薪ヲ焚クストーヴ多ク, 六百八十二戸中ストーヴヲ用フルモノハ四百一戸, 用ヒザルモノ二百八十一戸アリ」と記述されており, 当時の札幌郡白石村(現在, 札幌市白石

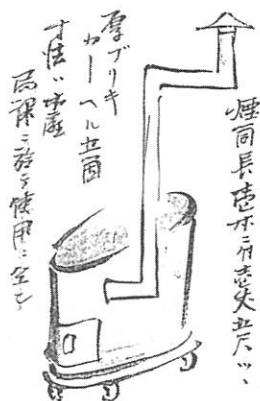


図-1. 明治11年『各支庁、各分署、文移録』に記載された薪ストーブの図
Figure-1. Steel sheet firewood stove
drawn in Meiji period in Hokkaido
出典:氏家(1996)p.85より転載

区)におけるストーブ普及率は59%になる。また、1924(大正13)年の北海道庁警察部編『雨竜郡秩父別村ニ於ケル農村保健衛生実施調査報告』には「本村ニ於テ冬期防寒用トシテ用フルストーブハ家庭用トシテハ石炭ヲ用フルモノ少ナク、多クハ薪ヲ焚ク、九二二戸中、ストーブ

ヲ用フルモノ六八七戸、用ヒザルモノ二三五戸アル」と記述されており、当時の秩父別村(現在、秩父別町)における普及率は75%にのぼっていたことがわかる。この時期が北海道における薪ストーブの普及期(第一次ブーム)であると思われるが、その勢いは長くは続かない。

IV 北海道における薪ストーブから石炭ストーブへの移行

矢島(11)は、「北海道のストーブ発達史にとっては薪ストーブから石炭ストーブへの移行が最も重要な問題であり、この点が解明されなければ鉄板製薪ストーブ製造の位置づけができない(p. 109)」とし、「第一次世界大戦後の日本における木材工業や製紙工業の発達には木材の需要を促したこともあって、木材や薪の値段が急騰(p. 111)」したこと、「炭礦の開発が進み出炭量が大幅に増え(p. 112)」たことによって、薪から石炭へ燃料の転換が進み、さらに投込式(上向通風式)から貯炭式(横向通風式)へ石炭ストーブが発達したことが重要であったと結論づけた。また、燃料転換の進行について、大久保(6)も、小樽のストーブ業者への聞き取りを紹介するカタチで、「薪ストーブから石炭ストーブへの移行は、欧州大戦(第一次世界大戦、筆者加筆)後と思うが、(中略)価格が前年に比べると、石炭は二倍に、木炭は三倍と、薪木にいたっては五倍というパニックに近いものになってから」進み、それは「燃料費節約に起因した(p. 48)」と述べている。

赤羽(1)によれば、大正期における木炭生産は「第一次世界大戦(1914~1918)を契機とする異常な好況を反映して木炭の市況も活気づき、木炭の生産量もまた約10%強生産増」になり、さらに北海道の木炭生産量は1915(大正4)年から1925(大正14)年にかけて全体の8.8%(113,045t)から12.0%(1,758,511t)に増加し、全国2

位から断トツの1位へと躍り出る(p. 119-120)。薪炭材の伐採材積が横ばい状態にあるなかで木炭生産量が続伸することは、薪利用の相対的な減少を示す。北海道では薪炭材の伐採材積が増加しているものの、同時期に木炭の生産量が飛躍的に伸びていることを考慮すれば、その目的は主に木炭生産であると捉えられる。すなわち北海道は日本の木炭生産基地としての役割を担った結果、薪炭材の価格が全国と比較しても異常な上昇を記録し、薪炭材を薪ストーブの燃料として利用するには厳しい状況が発生したと考えられる。

まさにこの厳しい状況下、1924(大正13)年に鈴木豊太郎が日本で最初の貯炭式ストーブの開発に成功する。宇部(8)によれば、鈴木福録商会は1925(大正14)年に北海道の高額所得者向けに2万台もの貯炭式ストーブを埼玉の川口に大量発注し、さらに翌年には炊事兼用ストーブを開発する。「日本古来の囲炉裏に似せて、暖をとりながら鍋を煮たりできる」この炊事兼用ストーブが「フクロストーブ」で最も多く販売、生産されたシリーズとなっていくのである。薪の高騰により石炭への燃料移行を検討せざるを得なかった道民にとって、しかしながら投込式石炭ストーブでは機能が不十分であり、非常に優れた貯炭式ストーブの開発はまさに待ち望んでいたことであったと考えられる。

V 第二次薪ストーブブームの到来

このように北海道では明治後期から大正期にかけて薪ストーブが普及し、第一次世界大戦期からの好景気を追い風にして木炭生産基地としての役割を担うようになると、燃料を確保することが困難になり、薪ストーブは貯炭式石炭ストーブに代替されていく。しかし、全国的には暖房設備は依然として未発達、すなわち囲炉裏を中心にした生活であったと考えられる。世界の暖房について研究した新穂(5)によれば、日本は、藁や葦を使った屋根の保護のために囲炉裏の排煙対策が欧米と比較して遅れ、「最近まで、否、現在でも一部の自然に煙が拡散上昇するに任せて屋根の煙出しを用いる所と、全く煙出しを取り付けない状態で家内の焚火をしている所とがある(p. 7)」。もちろんこのような農家は現在ではあくまで「一部」であるが、暖房と調理の機能を有する囲炉裏が多くの農家から消滅したのは戦後になってからのことである。以下、戦後における北海道と全国の薪ストーブの普及を聞き取り調査の結果からみていく。

樺太で板金工として薪ストーブを製作していた山下泰蔵氏は、1947(昭和22)年に引き揚げ、北海道函館市に山下板金工作所を開業した。昭和30年代になると息子の泰

氏と2人で月産20~30台のストーブを手作りで生産し、主に自転車で配送していた。おおまかにいえば薪ストーブと石炭ストーブの割合は2:1であった。この頃がストーブ生産のピークで「春から秋までストーブ作りっぱなし」の状態となり、一番の売れ筋は泰蔵氏が樺太で開発した「山下式オープン付」薪ストーブであった。しかし、昭和30年代も終わりに近づくと、炊事用の石油コンロや持ち運びのできる石油ストーブの登場などにより薪ストーブや石炭ストーブの需要は激減した。同じく函館市の大和金属は、満州から函館に引き揚げてきた先代(富山県魚津, 1919(大正8)年生まれ)が柄杓やバケツからパチンコ台まで扱う金属加工業としてはじめた高岸商店を前身とする。1952(昭和27)年に株式会社となり、プレス機械を導入して本格的な薄鋼板ストーブ生産をはじめている。1959(昭和34)年に約70名を雇用していたところが生産のピークとなる。

秋田県大館市においてもほぼ同じ時期にブームが来ている。成田板金工業所は1953(昭和28)年に開業された板金加工業が前身で、開業当時から秋になると薪ストーブを製作しており、周辺にも同じような業者が10件ほどあったという。少し遅れて、新潟では本間栄次郎が1960(昭和35)年に時計型薪ストーブをオリジナル製品として生産開始する。これが現在、年間約2万台を生産するホンマ製作所の前身となる。当初、板金職人がハサミによる手作りで1シーズン約300台を生産していたが、本間板金工業所と社名を変更した1965(昭和40)年の翌年に機械化され、1シーズン1,000台以上の生産体制の下で、長野や石川など県外の注文も受けるようになった。

このように、明治後期から大正期におけるブームの生産技術がなんらかの形で受け継がれ、昭和20年代後半から北海道および東北において板金屋や金属加工工場が手作りで薪ストーブの製作を再開し、そのなかからプレス機械を導入する業者が現れる。生産のピークは昭和30年代半ばから1965(昭和40)年頃で、これが第二次ブームと考えられ、板金屋による手作りストーブとプレス機械工場による大量生産ストーブの二系統が共存していた。こうして、北海道や東北の寒冷地域から徐々に全国的な広がりをみせたとと思われるが、新潟のホンマ製作所がプレス機械による本格的な生産を始めたときに、すでに函館では石油コンロや石油ストーブの登場により薪ストーブ需要が激減していた。次にみるように、1965(昭和40)年前後のこのズレはプロパンガスの普及と囲炉裏の消滅に起因する。

VI 全国におけるプロパンガスの普及と囲炉裏の消滅

まず戦後の燃料事情全般を概観すれば(2)、木炭は、5年平均で最大量を記録した1938(昭和13)年~1942(昭和17)年の平均生産量256万5700tを基準(100)にすると、1943(昭和18)年88.2, 1945(昭和20)年61.1, 1946(昭和21)年62.4と終戦後に低迷するが、1950年代になると80台になり、1957(昭和32)年に戦後最高の84.5(216万7000t)を記録する。しかし、翌1958(昭和33)年には69.3, 1963(昭和38)年に35.1, 1970(昭和45)年に6.9, 1980(昭和55)年に1.5と激減していく。薪類生産も、木炭同様に1939(昭和14)年以降5年間に生産量の最大があり、終戦に向かい減少し、戦後増加し始め、1954(昭和29)年に戦後最高を記録する。上記の木炭とほぼ同じ基準で以降の動向をみると、1960(昭和35)年72.7, 1965(昭和40)年28.7, 1970(昭和45)年8.6とやはり激減していく。

このように木炭や薪が減少するなかで、プロパンガスが家庭に普及していく。1959(昭和34)年9月20日の読売新聞朝刊(12)によるとプロパンガスは「31年には50万世帯しか使っていなかったが、その後毎年50%前後の急増を示し」、「年内(1959年)には二百万世帯を突破、都市ガスの三百三十万世帯に迫る」勢いであり、実際に1963(昭和38)年にはプロパンガス利用家庭数が都市ガス利用家庭数を追い越すことになる(2)。1966(昭和41)年の読売新聞11月7日朝刊記事「燃料はなにが得か」から作成した表-1をみると、東京でのデータであることを考慮する必要はあるものの、プロパンガスに比較して薪は価格が安い、熱効率が悪い、ため暖房で使える正味100kcalの費用は同じになることが示されている。

これを裏付けるように、全国18地区の里地里山において昭和20~30年代を知る70~80歳代を対象に養父(10)が実施したヒアリングは、プロパンガスが昭和30年代初頭から普及し始め、1960(昭和35)~1961(昭和36)年に全国的な広がりをみせるとの結果を残している。さらに、福島県天栄村湯本地区を調査した池上・新妻(3)によると、この地域では1959(昭和34)年に最初の燃料店が開店し、1964(昭和39)年前後にほとんどの世帯にプロパンガス

表-1. 暖房で有効に使える100kcalの費用比較
Table-1. Comparison of efficiency of the heating systems

種類	単位	発熱量 (kcal)	単価 (円)	100kcalの費用(円)	暖房熱効率(%)	暖房で使える正味100kcalの費用(円)
石油	リットルあたり	8,200	25	0.30	95	0.32
石炭	キロあたり	6,000	15	0.25	60	0.41
練豆炭	キロあたり	5,500	20	0.36	85	0.42
コークス	キロあたり	6,800	20	0.29	60	0.48
都市ガス	立方メートルあたり	5,000	25	0.50	100	0.50
プロパンガス	キロあたり	12,000	85	0.70	100	0.70
薪	キロあたり	4,000	13	0.32	45	0.71
木炭	キロあたり	7,000	50	0.71	90	0.79
電気	キロワット時あたり	860	13	1.51	100	1.51

出典:読売新聞1966年11月7日朝刊「燃料はなにが得か」より作成